# 第3講　小説対策　その1

**第2問**　次の文章は、蜂飼耳（はちかいみみ）「繭の遊戯」（二〇〇五年発表）の一節である。周囲の大人たちから「厄介者」扱いされている「おじさん」は、小屋に籠もって何かを作っていることが多かった。その小屋に幼いころの「わたし」はよく遊びに行っていた。これを読んで、後の問い（**問1～7**）に答えよ。なお、設問の都合で本文の下に行数を付してある。（配点　45）

壁に、ギターが掛けられていた。触りたい。「あれ取って」。すぐには取ってもらえない。「あれ、取ってよ。ちょっとだけ」。おじさんは、取るかどうかわざと迷うふりをしながら、金具を外しギターを下ろす。受け取り、抱えてみる。鳴らしてみる。どんなメロディーにもなりはしない。つまらないというより、不安だった。自分でばら撒（ま）いたおかしな音に、自分で不安になるのだった。「返す」「もう、いいの」。

なにか弾いてよ。頼むと弾いてくれる。いつも同じ曲だ。最後まで全部、聞いたことはない。いつも途中で、「あれ」と首を傾（かし）げる。「あれ、あれ」。凧（たこ）が落下するときのように、見えない糸が不意に弛（ゆる）みはじめて、ぷつんと止まる。「あれ、わからなくなった」。いつものことだが、いつも、がっかりする。I がっかり、という気もちには、かわいそうだ、と思う気もちが混ざっていた。生意気にも。五つや六つの子どもでも、そうしてこっそり、大人を哀れむときがあるのだ。

メモ欄

気まずくなり、いつも同じ質問をする。「なんていう曲」。つづきがわからないということは、どちらにもわかっていて、暗黙の了解なのに、おじさんは目を泳がせて、A音を探すふりをする。心をこめるように爪弾く。「アルハンブラ(注1)の思い出だよ」。アルハンブラってなに、とは聞けなかった。思い出というからには、人の名前だろう。きっと女の人の名前だ。そう思いこみ、恥ずかしさに密封されて、聞けないのだった。

おじさんが厄介者にされているのは、仕事をしてお金を稼ぐということをしないからだった。とはいえ、働かなくても済むような資産があるわけではない。ときどき、トラックの運転手などをして、そのときに必要な分だけ稼ぐのだった。いまでいうところのフリーターだ。快く思わない人は親戚中にいて、誰彼と顔を合わせるたび、叱られているようだった。ちゃんと仕事しなさい。もっとも口うるさいのは、おじさんの姉、つまり、わたしの母だった。説教がはじまれば、早く終わらないかな、とうんざりして、柱の陰から見ていた。大人に怒られる大人は、子どものようなものだった。おじさんは大人なのに、と悔しかった。

いったい、なにをしているのだろう、おじさんは。不思議だった。というのは、いつでも、忙しそうにしているからだ。自分で建てた小屋という繭に籠（こも）り、でも、眠ってはいない。じっとしてはいない。いつも、くるくると動きまわっている。器械をいじったり、なにか組み立てたり、切ったり、削ったりと。不思議だった。「なにしてるの」と聞けば必ず、「仕事」という答えが返ってくる。いつもなにかを作っているようだったが、その成果が見えるかたちで現れることは滅多（めった）にないのだった。

「いつまでも親のスネかじって」。ある日、おじさんの姉、つまり、わたしの母が大声を

メモ欄

上げて怒りはじめた。おじさんは耳が聞こえなくなった鳥のように、なにもかも無視して、母屋(注2)からすっと抜けて行った。「お母さん、なんとかいってよ」「いってるよ、いつも」「お母さんが甘いからよ」「もうわかった、あたしが死ねばいいんでしょ、じゃあ、死ぬよ」。祖母は罵りながら、豆の殻を剝(む)いた。豆の匂いは喧嘩(けんか)の匂い。いやになり、庭へ出て、小屋へと歩く。夜風がある。南天(注3)の繁(しげ)みがあたまを振る。重たくざわつく。闇のなかに四角く切り取られたおじさんの窓。叩(たた)く。聞こえないのかな。重たくざわつく南天の繁み。もう少し強く叩く。

「あたしだよ」。ほそく開いた。閉じこめられた虎のように、外のようすを窺(うかが)う。「おばあちゃんたち、喧嘩してるよ」。おじさんのせいだよ、とは口にしない。おじさんは、わたしがなにか企(たくら)んでいないかどうか、じいっと目をほそめて観察する。わたしはその瞬間的な観察に耐える。なにもないとわかると、上げてくれた。小屋のなかは、いつもインドの匂いがした。アルハンブラがわからないと同様、インドもよくわからなかった。インドで買ってきたんだ、と見せてくれたお香の包みの上で、目ばかり大きな赤い顔、青い顔が見つめ合っている。「手がいっぱいあって怖い」「神さまだよ」「これが」「インドの」。

仏壇に立てられるものより、ずっと長くて甘やかな香りのお香をもくもくと焚(た)き、おじさんは緑色の瓶の液体を飲んでいた。「それなに」「シードル(注4)」「飲みたいな」「子どもの飲み物じゃないよ」「ちょっとだけ」。シードルを固まりのように飲みこんで、おじさんはため息をつく。シードルを舐(な)めて、わたしもため息をついた。おじさんに隠して。擦り切れたカーペットの上に、さまざまな色のガラスの欠片(かけら)。赤、青、黄、緑、ピンク、紫、だいだい、縞(しま)模様。そばには、作りかけのランプの笠(かさ)のようなもの。

メモ欄

「そうだ、これ、どう思う」。ベッドの隅に腰掛けていたおじさんが、力なく立ち上がる。緊張する。意見を求められることなど、はじめてだったからだ。汚れた壁と黒い本棚の隙間から引き出されたのはステンドグラスの絵だった。ガラスはすべて嵌(は)めこまれ、完成品のようだった。鳥が二羽、空を渡っていくところ。「どう思う。わかるかな、鶴だけど」。

　五つや六つの子どもの目にも、その鶴にはなにか足りないと、わかった。鶴というより、もっとずんぐりした鳥に見える。翼をもう少しほそく長くしたら、いいのではないか。子どもの目にも、そんな意見が浮かぶほど、なにかが欠けていた。いま思うと、つまり、切れがなかったのだ。「悪くないよね」と、おじさん。いい、といってほしいのか。それとも、子どもは思った通りを口にすると期待して、本当の意見を待っているのか、わからない。そこのところがわからなかった。「悪くないでしょ」。B<u>そのとき、わたしのなかでむくむくと目を覚ましたのは、母に似たものだった。</u>

「あひるみたい」。おじさんの顔が内側から崩れる。「鶴ってもっと、スマートだよ」。崩れる。思いがけないほど、あっさりと。それを見ると、取り返しのつかないことをした、という気もちになった。同時に満足だった。いいと思わないものを、いいとはいえない。いってはいけない。これで嫌われるのなら、それはそれでしかたないと、にわかに強気になり、息を吐いた。満足と孤独。しのびこんだ蛾(が)が、押せない窓を押して暴れ、しきりに乾いた音を立てる。そのとき、わたしはなにかを、教えられていたのだ。でも、そういう考えをひろげることはできず、なにか大事なものを自分で探り当てたつもりになり、昂揚(こうよう)していた。おじさんの手にこびりつく、石鹸(せっけん)では落とせない塗料。眠くなったふりをして、小屋を出た。

メモ欄

それからしばらくして、今度は陶芸の虫が、おじさんに取り憑いた。どこから土を運んで来るのか、周りが気づいたときにはもう、小屋の入口に敷いた古いビニールシートの上に、大小の器がいくつもならんでいた。「絵は、ないの」「絵は、乾かしてからだよ」。そういうことのすべて、本や雑誌を見て、やり方を覚えるのだという。「あんなに器用なんだったら、少しは活かせばいいようなものだけど」。母がいないとき祖母はそんなふうに呟いた。でも、母がいて、母に責められるときには、決してそうはいわない。「だって、あたしが産んだんだから、どうしようもない」という。「焼き物をやるっていっても、なにも習わないで、そんな我流でやっているだけじゃどうしようもない、仕事になんかならない」と、母。

五つや六つの子どもにとって、大人は二種類に分かれる。遊んでくれる人と、そうでない人。おじさんは遊んでくれるばかりか、いつもなにかを熱心に作っていた。他の大人たちが心配してため息をつくほど無力だとは、思えないのだった。小屋の陰にしゃがんで蟻の巣を見ていると、壁を通して、削ったり切ったりする音が漏れ出てくる。おじさんは確かに、なにかしている。それだけは、わかった。

「ちょっと、ちょっと」。池のそばに座りこみ、ゲンゴロウ(注5)を探していたら、おじさんに呼ばれた。小屋の窓が開き、意に反して閉じこめられた虎のように、手招きする。ゲンゴロウは見つからない。金魚が上がってきて静かな水面へ口をつけ、波紋をひろげる。ひょっとすると、どこかへ飛んでいったかなゲンゴロウ、と思いながら答える。「いま行く」。見せたいものがあるか、用をいいつけるか、どちらかだ。

小屋を覗いて、おどろいた。奇妙なかたちの白いものが、整列している。どれにも穴が

メモ欄

ずらりと開いていて、笛かな、と思う。「オカリナ(注6)だよ」。乾かしているのだった。「こんなにたくさん作ったの」というと、「売るんだ」。秘密の計画を打ち明けて、声をひそめた。「だけど、ちゃんと鳴るの」「鳴るよ、もちろん」。信用しないでいると、おじさんは「試作品」といって、箱のなかから、完成した水色のオカリナを取り出した。両手で持って、口をつける。迷子の梟（ふくろう）のような音。塗られた水色の濃淡は、模様のようにも、ただの斑（むら）のようにも見える。きれいかどうかわからない布で吹き口を拭い、わたしに渡した。

　吹く。鳴ることは鳴る。でも、ばらばらの音。「これ見ればわかるよ」といって、おじさんはこまかく折った紙切れを出した。運指法(注7)が載っていたが、見てもよくわからなかった。ただ鳴らしているだけでも、三つ四つの音階に、たどり着くことはできる。欲しくなった。「ちょうだい」と頼むと、その願いを聞き入れるかどうか深く悩む、というふりをしながら、「じゃあ、あげよう」。それから、取り出される別の木箱。古びた木箱色のついたオカリナが、いくつも息を殺して夜明けの玉子のようにじっとしていた。「いっぱいあるから」。勝ち誇ったようにわらう。

　Ⅱ<u>すごい、と思いながら、がっかりした。</u>こんなふうに自分の手でオカリナを作ることができても、オカリナを作れない他の大人たちから、怒られつづけ、文句をいわれつづけるのか、と。拾った枝で池の水を掻（か）きまわしながら、あたまを悩ませた。他の人たちから見れば意味が薄いことを、自分の熱意だけでつづける。どこへ繋（つな）がっていくのか、わかりもしないまま。C<u>触角の取れた虫。方向感覚を破壊された鳥。それは、どういうことなのだろう、と。おじさんの心配をしながら、自分も晴れない霧につつまれた。</u>オカリナどころか、なにも作れない自分は、どうすればいいんだろう、と。

メモ欄

だれもいないところへ行って、オカリナを吹く。D曲にはならない。ただ、ばらばらの音。吹いていると、身体の表面が分厚く剝がれ落ちる気がする。それを拾い集めるべきかどうか、わからない。捨てておいていい、殻のようなものかもしれない。おじさんは、たくさんのオカリナを、バザーで売るというのだった。運指法の説明もつけて、とそれがすごいアイデアであるかのように、いうのだった。

（注）
1　アルハンブラの思い出――ギターの曲名。アルハンブラはスペインにある宮殿の名前。
2　母屋――住居のなかで、生活の主な場となっている建物。
3　南天――小さな赤い実をつける低木。
4　シードル――リンゴの果汁を発酵させた発泡酒。
5　ゲンゴロウ――池や沼にすむ昆虫。
6　オカリナ――鳥の形を模した土製の笛。
7　運指法――楽器を演奏するときの指の運び方。

メモ欄

**問１**　傍線部Ａ「音を探すふりをする。心をこめるように爪弾く。」とあるが、ここで「わたし」が捉えているおじさんの様子はどのようなものか。最も適当なものを、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 11 。

① 自分が途中までしか弾けないことを取り繕うために、弦を鳴らし、身を入れて曲の続きを思い出そうとしているかのように見せている。

② 弾き切ることこそできないが大切な曲であることを「わたし」に伝えるために、記憶をたどって、一音一音探るかのように見せている。

③ 曲が弾けなくて気落ちしていることを「わたし」に悟らせないために、曲を想起しつつ、追憶にひたっているかのように見せている。

④ 曲を弾き通せなくて体面を失った落胆を隠すために、あらためて丁寧に曲を弾こうとし、深い思い入れがあるかのように見せている。

メモ欄

**問２**　傍線部Ｂ「そのとき、わたしのなかでむくむくと目を覚ましたのは、母に似たものだった。」とあるが、このときの「わたし」に起こった心の動きの説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 12 。

① 自分の作品に不足している点がないかを気にしているおじさんが情けなくなり、あえて厳しい意見を述べておじさんに反省を迫りたいと思った。

② 作品の出来の良さを疑わず高い評価を期待するおじさんに違和感が芽ばえ、よい作品ではないという意見を相手を傷つけてでも伝えたいと思った。

③ 自分の作品に自信がない様子であるおじさんにいらだちを覚え、作品の出来ばえに対する失望感からも自分が気づいた欠点を告げようと思った。

④ 作品の完成度が高くないにもかかわらずよい評価を求めるおじさんに現実を突きつけたい気持ちが生じ、感じたことを率直に伝えようと思った。

メモ欄

**問３**　本文31行目から38行目と72行目から80行目の二箇所には、おじさんの生き方に対する母と祖母との姿勢の違いが表れている。その違いの説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［13］。

① おじさんのしていることについて、母は生計を立てるために独学でなくきちんと技術として習得すべきと主張しているのに対し、祖母はいつかは実力を見せるだろうと期待している。

② おじさんのしていることについて、母は家族の負担になっているのだからやめるべきだと主張しているのに対し、祖母はそれほど大きな負担ではないからかまわないと認めている。

③ おじさんのしていることについて、母はその価値を認めずに仕事をして収入を得るべきだと主張しているのに対し、祖母は素質が仕事につながっていないともったいなく思っている。

④ おじさんのしていることについて、母は祖母がもっと厳しく叱るべきだと主張しているのに対し、祖母はもうどうしようもないのでこれ以上は叱ってもしかたがないと諦めている。

メモ欄

**問4**　波線部Ⅰ「がっかり、という気もちには、かわいそうだ、と思う気もちが混ざっていた。」、波線部Ⅱ「すごい、と思いながら、がっかりした。」とあるが、この二つの「がっかり」にはどのような違いがあるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［14］。

① 波線部Ⅰでは、取り組んでいることを達成できず子どもの期待を裏切るおじさんに同情していたが、波線部Ⅱでは、おじさんが独学で創作する能力を持っているにもかかわらず、優れた作品を生み出して人を感動させられないために家族から怒られてばかりいることをやるせなく思うようになった。

② 波線部Ⅰでは、取り組んでいることをやり通せないおじさんの意志の弱さを情けなく思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんがいろいろなものを作り出す能力があるにもかかわらず、何かに絞ってそれを完成させようとはしないために大人には受け入れてもらえないことを悔しく思うようになった。

③ 波線部Ⅰでは、取り組んでいることが向上しなくてもよいと思っているおじさんを不憫（ふびん）に思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんが人を感心させるものを作る資質を持っているにもかかわらず、それを母や祖母に理解させようとしないために家族から罵られ報われないことを無念に思うようになった。

④ 波線部Ⅰでは、取り組んでいることが中途半端で終わってしまうおじさんを気の毒に思っていたが、波線部Ⅱでは、おじさんが自分自身の手でものを作り上げることができるにもかかわらず、いまだ自活してはいないために大人からは叱責

メモ欄

され価値を認められずにいることを残念に思うようになった。

**問5**　本文の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①〜④のうちから一つ選べ。解答番号は 15 。

① 「繭に籠り」（26行目）、「耳が聞こえなくなった鳥のように」（32行目）、「閉じこめられた虎のように」（39行目）は、いずれもおじさんが不本意な状況におかれていることを比喩で表している。

② 「叩く。聞こえないのかな。重たくざわつく南天の繁み。もう少し強く叩く。」（37〜38行目）は、「わたし」がおじさんの小屋を訪れた体験をその時点に立って臨場感をもって表している。

③ 「そのとき、わたしはなにかを、教えられていたのだ。」（68行目）は、語り手「わたし」が幼少期の体験を振り返り、現在の視点からの解釈も加えて語っていることを表している。

④ 「オカリナが、いくつも息を殺して夜明けの玉子のようにじっとしていた」（103行目）は、オカリナを玉子になぞらえるとともに擬人法を用いて、おじさんの作品を印象的に表している。

メモ欄

**問６**　傍線部Ｃ「触角の取れた虫。方向感覚を破壊された鳥。それは、どういうことなのだろう、と。おじさんの心配をしながら、自分も晴れない霧につつまれた。」とあるが、このときの「わたし」の心情の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は［16］。

① 行き先が見えないままで進んでいくおじさんの生き方について問うなかで、おじさんの現状を、ひとごとではなく自分自身の生き方にも関わるものとして受け止めてとまどっている。

② 知覚の一部を失った生き物におじさんのあり方を重ねるなかで、おじさんの苦労に寄り添うことも支えになることもできない自分が、おじさんのためにできることはないか悩んでいる。

③ 衝動に突き動かされて迷走しているおじさんの姿を見るなかで、おじさんがどこに向かっていくかわからず、それに振り回され続けることになる自分たちのことも不安に思っている。

④ 本当にやりたいことが見つからずにもがくおじさんの苦しさについて考えるなかで、いつも周囲の大人に否定され文句を言われ続けるおじさんの内心を測りかね、途方に暮れている。

メモ欄

**問７**　傍線部Ｄ「曲にはならない。ただ、ばらばらの音。吹いていると、身体の表面が分厚く剝がれ落ちる気がする。それを拾い集めるべきかどうか、わからない。捨てておいていい、殻のようなものかもしれない。」とあるが、「わたし」は結末部分でどのような心境になったと考えられるか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 17 。

① 冒頭の「わたし」は、自らがギターを弾けないことに気づくとおじさんに代わりに弾くように頼んでいた。それに対して結末部分の「わたし」は、おじさんから離れて誰もいないところでオカリナを吹いており、自分を保護してくれる存在がいることの安心感を恐る恐るではあるものの手放そうとしつつある。

② 冒頭の「わたし」は、ギターを弾いたり作品を見せてくれたりして一緒に遊んでくれるおじさんの小屋のなかで充足感を得ていた。それに対して結末部分の「わたし」は、オカリナを小屋の外で吹いているように居心地のよい場所からあえて抜け出したことで、自分の道を進んでいくことの不安を実感しつつある。

③ 冒頭の「わたし」は、思うようにギターが弾けないおじさんを見て哀れむなど物事を醒めた目で見る傾向があった。それに対して結末部分の「わたし」は、ついにオカリナを作り上げたおじさんの熱心さに触れたことで、興味が持てるかどうかにこだわらずに挑戦する必要があるのではないかと迷いつつある。

④ 冒頭の「わたし」は、メロディーにならないギターの音のとりとめのなさに不安を感じてすぐに手放していた。それに対して結末部分の「わたし」は、オカリ

メモ欄

ナの音がばらばらであることに気づいてもなお吹き続けており、心もとなさを覚えながらも自身の価値観が揺らぎ始めていることを自覚しつつある。

「大学入学共通テスト」２０２５年度本試験より

メモ欄

## ■2025年度 本試験

| 問題番号（配点） | 設　問 | 解答番号 | 正　解 | 配　点 |
|---|---|---|---|---|
| **第2問** （45） | 1 | 11 | 1 | 6 |
| | 2 | 12 | 4 | 6 |
| | 3 | 13 | 3 | 6 |
| | 4 | 14 | 4 | 7 |
| | 5 | 15 | 1 | 7 |
| | 6 | 16 | 1 | 6 |
| | 7 | 17 | 4 | 7 |